論文の内容の要旨

論文題目： イブン・スィーナーの中期作品における生命思想――ルーフと魂の概念に焦点を絞って――

氏名： 俵 章浩

本論文は、イブン・スィーナー（Ibn Sīnā, 980-1037 年）の中期著作を主な資料とし、それらの著作におけるルーフと魂の概念に着目して、その時期のイブン・スィーナーの生命思想が、医学的議論と哲学的議論、さらにイスラーム教義についての議論の総合の上に成立していることを示そうとするものである。

調査にあたり以下の三点に特に注意を払った。まず、調査対象とする著作の選び方である。これまでのイブン・スィーナーの医学思想の研究では『心臓の薬』にはあまり関心が払われてこなかったが、イブン・スィーナーのルーフ観の解明に重要な作品であるために取り上げた。『医学典範』第一巻が著されたのは 1013 年、また、『心臓の薬』が著されたのは 1024 年であり、本論文で対象とする期間は主にこの十年ほどの間である。また、終末論が提示される『犠牲祭の論考』（1015 年）は、この時期のイブン・スィーナー思想を理解する上で重要な手掛かりを与えるものであるため、本研究における主な資料として含める。

第二に、これまで別個に扱われていた学問的諸領域を総合して理解する方法をとる。従来のイブン・スィーナー研究では、研究者の関心のありかが医学なのか哲学なのかによって、対象とする一次資料に偏りがあった。しかし、イブン・スィーナーの思想体系の実相をより的確に捉えるには、イブン・スィーナー思想における哲学と医学、さらにイスラームという重層性を考慮したアプローチが有効である。

第三に、時間軸を意識し、イブン・スィーナーの思想の通時的な変化を捉えることを試みる。

従来の研究では、1020 年代に書かれた『治癒の書』や 1030 年代に執筆された『指示と勧告』など、中期から後期の代表的な著作に焦点が当てられ、それらの記述を基にしてイブン・スィーナーの思想として提示されることが多い。これらの後期著作と本論文で検討する中期著作の比較を通じて、思想の変化を把握する。

各章の概要は以下の通りである。

第一章では古代ギリシアからイブン・スィーナーに到るまでのルーフ概念の略史を示す。「ルーフ（rūḥ）」とはギリシア医学で「プネウマ（πνεῦμα）」と呼ばれていたものを指している。イブン・スィーナーが提示するルーフ理論が、先行するさまざまなルーフ理論の継承と組み合わせの上に成立していることが理解される。

第二章においては、『医学典範』の第一巻と『心臓の薬』の記述に基づき、ルーフ概念の精緻化がイブン・スィーナーによってなされたことを論じる。ガレノス理論に基づく医学的なルーフ概念は、イブン・スィーナーの医学理論に組み込まれ、『医学典範』の第一巻では、魂と峻別されたルーフが身体と魂の媒介としての役割を持たされている。しかしその一方、『心臓の薬』では、単なる身体の一器官として見なすには相応しくないような性質（「光輝く」や「天体に似る」）がルーフに帰されている。イブン・スィーナーは医学的なルーフ概念に別の思想潮流のルーフを組み合わせて自身の医学理論を展開しているのである。

また第二章では、イブン・スィーナーの発生論を二段階の発生過程に分けて理解する視点を提示する。物体が独特な混和状態（mizāj）を帯び、形相を受け取る準備をするのが第一段階、そして能動知性から形相が付与されるのが第二段階である。「混和状態」というガレノス的医学概念を用いた発生論と、能動知性というアリストテレス解釈の中から生まれてファーラービーによって定式化された概念を用いた発生論が、イブン・スィーナーによって天体に似た混和状態を持つとされたルーフの概念を介して、発生の二つの段階として結びあわされている。

第三章では、イブン・スィーナーの「生命」の定義が初期から後期にかけて変化したことを論じる。初期には『魂論要綱』（997 年頃執筆）に見られるように、魂の有無によって生命の有無が判断されるというアリストテレス哲学に倣った基準が採られていた。しかし、後に、『治癒の書・植物論』（1027 年執筆）の記述に見られるように、随意運動が生命の基準とされた。アリストテレス的な定義から離れるこのような基準の設定の背景には、イブン・スィーナー自身の医学的な考察の経験が関係している。医学理論において用いられる「能力」（qūwah）の概念に対する考察を通じて、生命を定義しなおしたのである。1013 年頃に執筆された『医学典範』の第一巻にその考察の跡を見ることができる。

第四章ではイブン・スィーナーの終末論的著作である『犠牲祭の論考』の記述に基づいて彼の生命思想の一側面を解明する。イスラーム教義から要請される原則に対して、哲学や医学の議論を用いて対応する中に、彼の生命思想の一端が表れている。死後の魂が天上界に帰ることを、イブン・スィーナーは「帰還」を意味する「マアード」（maʿād）という語で表現するが、この宗教的な議題について彼はクルアーンの記述に立脚する態度を示しながらも、実際には哲学的魂論を進めている。その魂論はまた、彼自身の医学的な議論を踏まえたものでもあった。そのことは、サービト・イブン・クッラのルーフ理論に対する批判から理解される。イブン・ス

ィーナーの考えるルーフとはあくまでも物質性を有するものであって、生理的機能を果たす微細な物体という物質性の領域を超えることはなかった。イブン・スィーナーは「帰還」という宗教的な要請に対し、魂の非物質性を基軸とする哲学的な議論で答えるが、その議論には医学的な知見が取り入れられているのである。

各章における議論を踏まえると、イブン・スィーナーの生命思想を理解する視座として以下の三つが提示できる。

第一に、イブン・スィーナーの生命思想を理解するには、アリストテレスとガレノスの考えとは異なる要素を考慮する必要がある。イブン・スィーナーの思想における概念や理論は、哲学的側面についてはアリストテレスの思想に、医学的側面についてはガレノスの思想に多くを負っているが、イブン・スィーナー思想の構成する要素は他にもある。

そのことはまず、イブン・スィーナーの魂論について言える。イブン・スィーナーはアリストテレス哲学の原則に基づいて魂の非物質性は維持しながらも、そこに魂の身体からの離脱性を付加し、さらにその非物質的・離在的魂が個別性を保持すると考えた。魂の個別性を保持することで、死後に各自に賞罰が課せられるというイスラームの観念との整合が図られている。こうして、両要素を盛り込む形で構築されたのがイブン・スィーナーの魂論である。

他要素の追加という現象はルーフの概念についても言える。イブン・スィーナーの提示するルーフ概念はガレノス理論が基盤となっているが、そこに別の要素が追加され、ルーフ概念の適用範囲が拡大されている。発生論の文脈ではルーフは魂を受け取る実体だとされている。また、感情の動きがルーフ概念を用いて説明され、そこに理論的根拠が与えられている。こうしたことはイブン・スィーナーの医学は伝統的医学を集積して体系的に整理し直したものだという一般的な理解を覆す一例であると言える。

第二にイブン・スィーナーの思想は時間の経過とともに変化しているということが言える。ルーフ概念の変容および生命定義の変更がその具体例である。ルーフの概念についてはガレノス医学の概念を引き継いだが、それを自身の思想体系に取り込むにあたって改変を施した。また、生命の定義について初期と後期に違いがあることが分かり、その理由が中期作品に求められることが示された。

第三に、医学や哲学、それに宗教的観念の思想的連関が働いていることが指摘できる。そうした連関を理解する鍵となるのがルーフ、魂、生命の諸概念である。

まず、ルーフという伝統的な医学的概念の洗練化は、哲学の側からの要請に応えたものだと言える。イブン・スィーナーの理論では、ルーフが魂という非物質と身体という物質を介在する生理学的な機能を持つにとどまらず、人間の形成という局面において魂の受容という重要な役割を担わされている。身体と魂の結合という哲学的な論題に、ルーフという従来の医学的概念の拡張によって対処しているのである。

また、生命の定義が変更されていることは、医学上の考察が哲学的議論に影響を与えたことを示している。何をもって「生きている」と見なすのかという哲学的な議論には、「能力」という医学上の概念が持つ意味が関わっているのである。また、動物的能力の有無によって生物と

無生物が分けられているのだが、ルーフの有無もここで線引きがなされている。ルーフ概念の重視と生命の基準の変更との間にある関係が示唆されている。

最後に、魂論については、イブン・スィーナーはイスラーム教義からの要請を満たす試みをしているが、さらに、そこには医学上の原則を保持する姿勢が見られる。イブン・スィーナーの考えでは、死後、魂は身体から離脱するとされている。魂は物質性に依存しない純粋な非物質的実在であり、身体に「刻印される」ものではないため、そこから離れることができると考えられている。この物質性という観点は医学の領域でも重視されている。医学的著作において、物質性を有するルーフは物質性を有しない魂から峻別されている。物質性を基準としたルーフと魂の違いに対するこうした医学上の認識が、イスラーム教義への対処を試みる哲学的な魂論にも適用されている。